

の重要度が高くなっていた。全体として経済的・社会的成功よりも家庭的な幸福を求めている傾向が見られるが、女子ではこの傾向がより顕著になっている。経済的・社会的成功は男子では重要とも重要でないともいえない中間的な位置にあるのに対して、女子でははっきり重要でない方向に傾いている。

学年により傾向を見ると、概ね学年が上がるにつれ重要度がさがる傾向が伺える。成長とともに各人の価値観がしだいはっきりし、重要だと考えるものが個別化していくのにもない、全体として想定された項目の重要度が低下するのだと考えられる。特に「成績」「進学」など学業達成に関する項目での低下の程度は著しい。中学生では学業が生活の大きな部分を占めており、彼らが学業場面での成功に多大な関心を寄せていることが示唆され、翻って学業場面での成功に関する効力感が中学生では、大きな意味を持つことが推測される。一方「結婚」および「就職」は学年を通していずれも高い水準にあり、変化はない。自分の希望する仕事を見だしその職に就くことと、望ましい相手を見だして持続的な関係を取り結ぶことが、青年期の主要な課題であると考えれば、当然のことながらうなずける結果である。

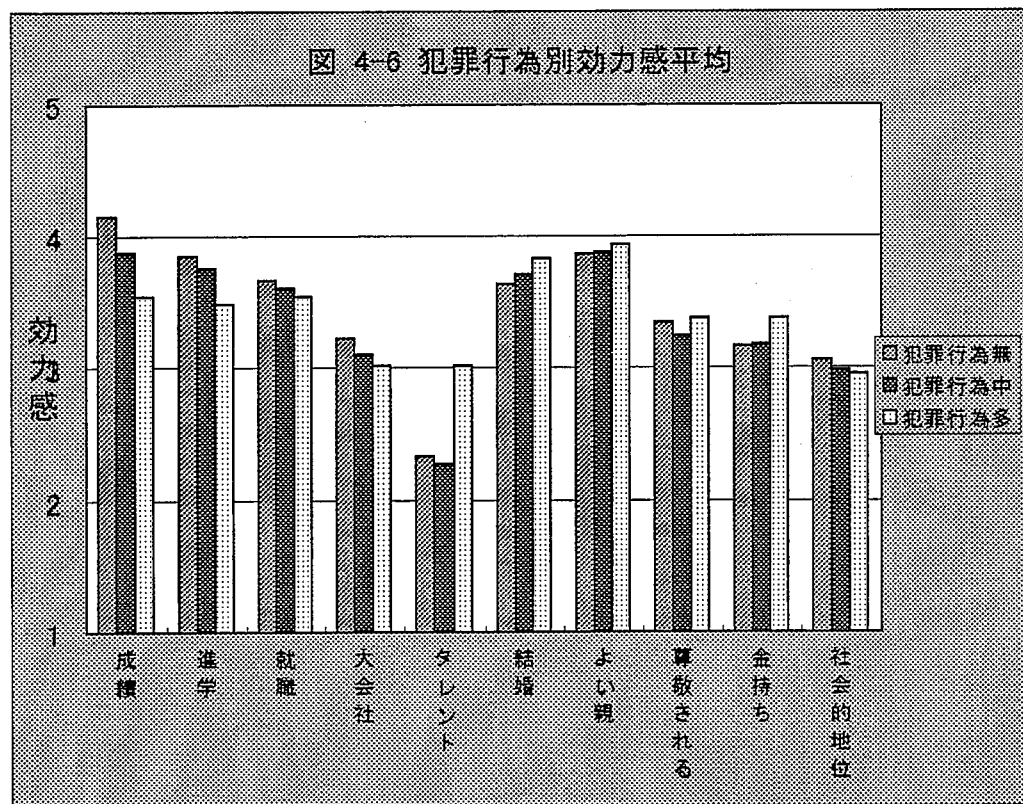
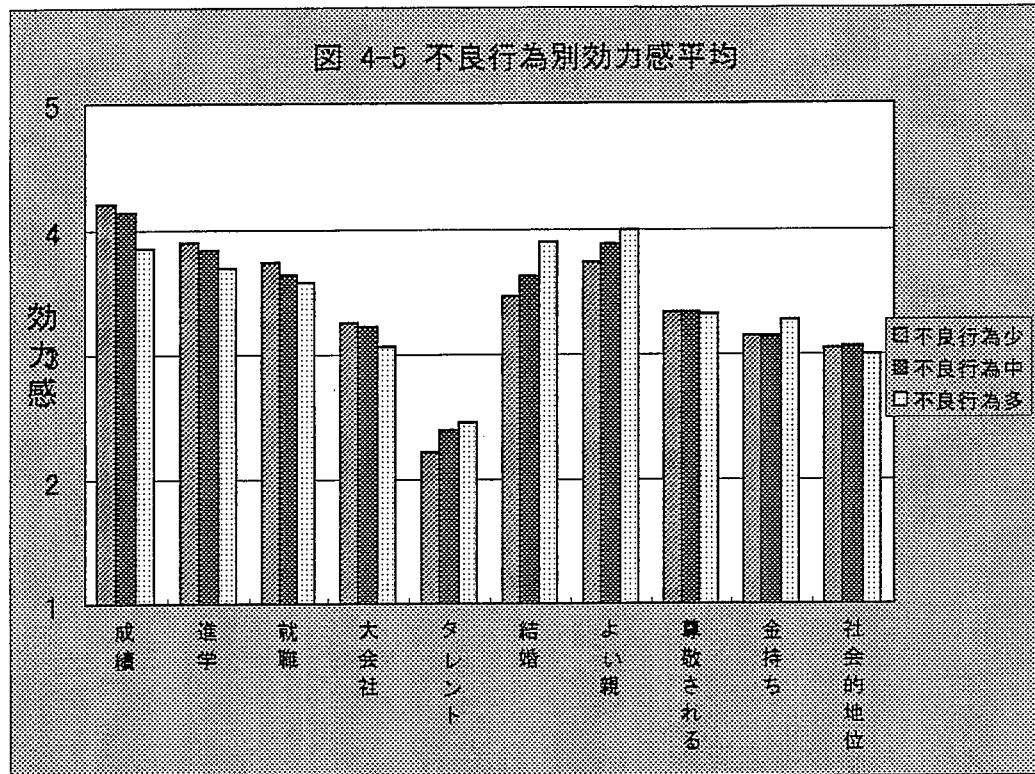
3. 逸脱行為や被害体験・被害不安と効力感の関係

(1) 逸脱行為の多少と効力感

逸脱行動の多い少年と少ない少年とでの効力感の相違について検討した。

まず不良行為について、2章に記述した基準に従って、多い少年、中間的な少年、及び少ない少年の3群に分け、それぞれの群の効力感の平均値を図4-5に示した。不良行為の多い少年の方が、効力感が低い項目、逆に不良行為の多い少年で効力感の高い項目、不良行為の多少と効力感との間で関係の認められない項目に分けることができる。すなわち「成績」「進学」の学業達成や「就職」「大会社」といった職業達成の項目においては、いずれも不良行為の多い少年群で効力感が低下しているが、逆に「タレント」と「結婚」「よい親」といった家庭的な領域での成功については不良行為の多い群において効力感が高い。また「尊敬される」「金持ち」「社会的地位」などの社会関係における成功に関しては関連が認められない。こうした結果から不良行為の多い少年は、学業達成や職業達成での効力感を持ちにくくなっており、その代償を家庭的幸福に求めていると考えることができるかもしれない。職業達成が現在の社会において学業場面での成功の延長戦上にあるとすれば、従来の研究が示しているように、当面の課題である学業達成において十分な効

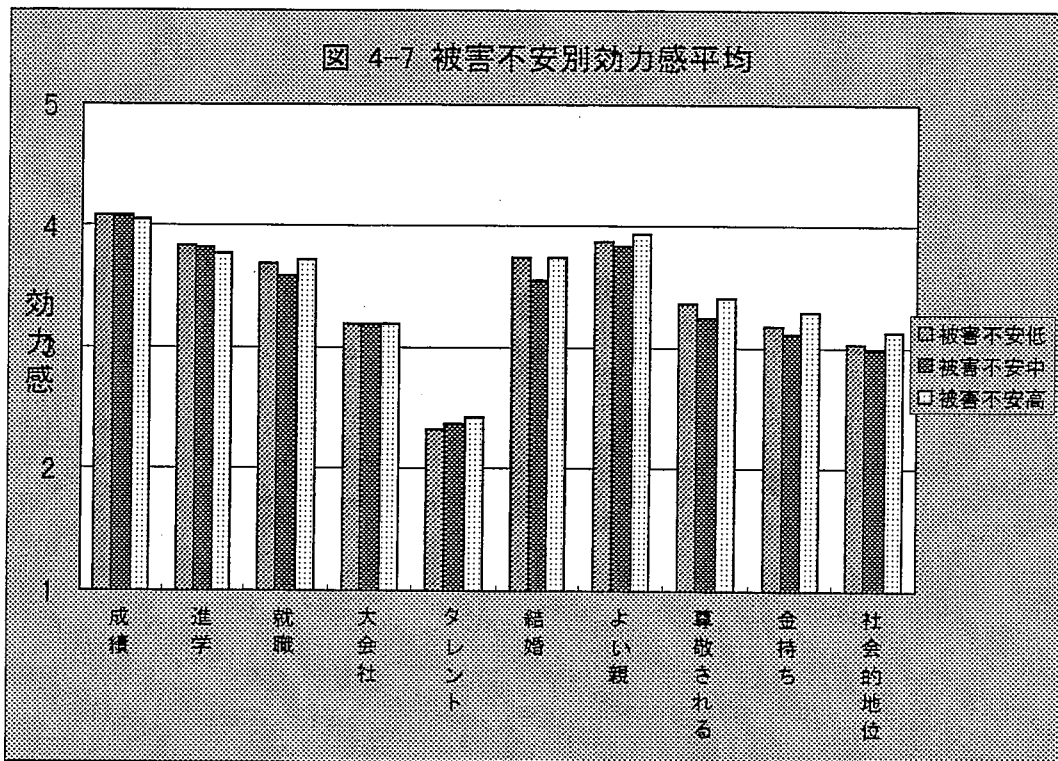
力感を持つことができないことが、不良行為と結びついていると考えることができよう。



やはり2章に示した基準によって、犯罪行為の有無及び多少によって、多い、中間、無しの3群に分割した上で、効力感の平均値を求めたものが、図4-6である。犯罪行為によって群分けした場合も、不良行為の場合とほぼ同様の結果が得られている。学業達成に関しては、犯罪行為による群わけの方が、効力感の違いが顕著になっており、やはり学業場面での不適応感が、非行と結びついていることを示唆する結果となっている。

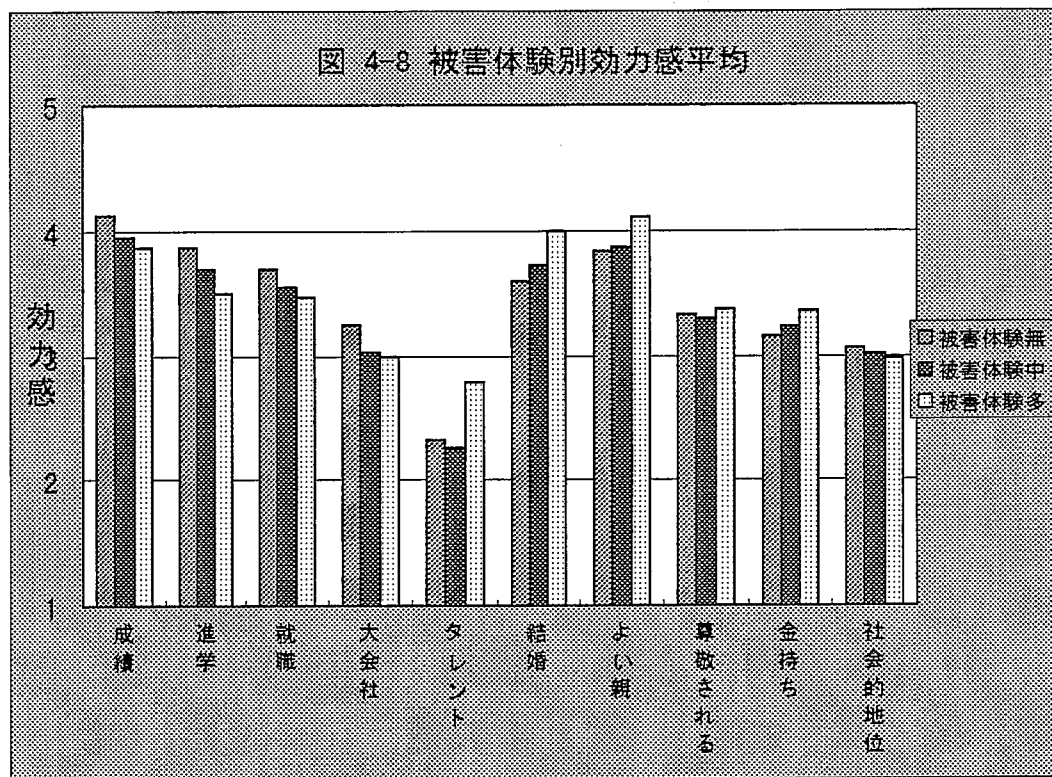
(2) 被害体験の有無及び被害不安と効力感

2章の基準に従って、被害にあう不安の程度について高・中・低の3群に分割した上で、それぞれの効力感の平均をみたものが図4-7である。全体として被害不安と効力感についてははっきりした関係がみられない。しかしながらいくつかの項目では、中程度の不安を持つ群で効力感が低い傾向が伺え、特に「結婚」についてはそのような傾向が認められる。一般には効力感が高ければ不安は低いと考えられるので、低不安群で効力感が高いのは当然としても、逆高不安群でも効力感が高く、U字型の関係を示しているのはなぜか、定かではない。後に見るように高不安群では、「結婚」の重要度をより高く評価しておりそのことが効力感にも影響しているかもしれない。



被害体験についても同様に2章の基準に従って、多い、中間、無しの3群に分割した上での効力感の平均を図4-8に示した。被害体験による効力感の違いは、被害不安とは様

相を異にし、むしろ逸脱行為の多少による違いと同様のパターンを示している。すなわち学業達成や職業達成では被害体験多群で効力感が低く、逆に家庭的幸福においては被害体験多群で効力感が高くなっている。被害体験有無による相違において、不良行為の多少による相違と同様のパターンが見られたことは、両者の関連を示唆するものである。実際不良行為得点と被害体験得点とは全体的にはほぼ無相関であるが、例えば中学3年生において、被害体験無し群の場合、その中で不良行為多群の占める割合は27%にすぎないが、被害体験多群の場合には、不良行為多群の割合は65%に達している。被害体験については、経験がないとするものが大多数なのであるが、不良行為の多い少年の場合いくぶん被害にもあいやすい状況がある、特に中学生においてはこのような状況があるのではないかと考えられる。



4. 逸脱行為や被害体験・被害不安と重要度の関係

不良行為別の重要度の平均を図4-9に示した。効力感と似たパターンを示しており、不良行為の多い少年では、学業達成において相対的に重要度を低く評価し、逆に家庭的な成功の重要度を高く評価している。これは効力感のパターンと一致している。しかしながら職業達成に関しては、不良行為の多い少年では効力感が低くなっていたが、重要度につ